福田恆存記念會シンポジウム

福田恆存生誕九十年記念會が平成十四年十二月十三日（金）会場・東京都文京区三百人劇場にて開催されました。司会・金子光彦・出席者・井尻千男・坪内祐三・富岡幸一郎・土井義士

司会者・金子光彦開會の挨拶。

金子　本日は福田恆存先生の御生誕九十年の記念會にかくも多数お集まり戴きまして誠に有り難う御座います。主催者を代表致しまして、一言ご挨拶申し上げたいと思います。本日の司会、進行を務めさせて戴きます、金子光彦と申します。どうぞ宜しくお願い致します。早いもので福田先生がご逝去されまして、はや八年が経ちます。また、二年後には没後十年の年を迎える事になります。振り返りましたらこの間、世の中の世相、言論さまざまに変化いたしましたけれども、現象に流されないで物事の本質をきちんと見つめるのは困難な世の中に益々なって来ている。そんな風に痛感しています。私達はそういう時代であるからこそ福田恆存先生の思想と生き方にもう一度きちっと焦点を当てて見つめ直す必要がある、そういう思いで本日の會を企画いたしました。主催者として福田恆存を考へる會と生

意気な名称を付けさせて戴きましたけれど別に組織団体では御座いませんで私、金子と文芸評論家の富岡幸一郎さん演劇評論家の土井義士さん。三名で永年福田先生の文章をそれなりに愛読して来た、私淑して来た者で御座います。また、私達の企画を実行するに当たりましてどこでやるべきかと謂う事で考えましたけれど、ここ三百人劇場をおいて無いと謂う事で財団法人、現代演劇協會こちらにご相談致しまして図らずも協賛戴けるという事で大変喜ばしい結果となりました。この場をお借りしまして現代演劇協會の皆様に篤く御礼を申し上げたいと思います。また、私共と致しましては、私達以上に相応しい方も沢山いらっしゃると、その事は重々心得ているつもりで御座います。今後色々な形でそういった方々の具体的な企画が進んで参る事を期待して止みません。本日の記念會で御座いますが、第一部は福田先生がかつて登場されたテレビフィルムを上映いたします。これは昭和四十八年にテレビ東京におきまして「人に歴史あり」（行動する知識人・福田恆存）というタイトルで放送されたもので御座います。この貴重なフィルムの上映に当りましてはテレビ東京様に格別のご支援を戴きました事を申し上げたいと思っております。第二部におきましては、福田先生の次男でいらっしゃいます福田逸さんに「父を語る」

という演題でお話を戴きたいと思います。福田逸さんは現在、現代演劇協会の理事長と劇団「昴」の代表でいらっしゃいまして、演劇の普及、運営に当られておられます。また、翻訳、劇作、演出も手がけられまして、明治大学の教授としても教壇に立たれましていろんな幅広い分野で活躍されておられます。最後に第三部におきましてはシンポジウムを開催致します。御登壇戴きますのは、井尻千男さん坪内祐三さん富岡幸一郎さん土井義士さん以上の四氏で御座います。どうぞ最後までおつきあい戴きますようお願い申し上げます。

シンポジウム

金子　第三部としてシンポジウムをおこないます。まず、パネラーの紹介をすべきですがお時間もありますので、詳しい紹介は皆様のお手元のパンフレットをご覧戴きたいと思います。先ずこちらでは今回は、お名前のみご紹介させて戴きます。中央から井尻千男さんです。それから坪内祐三さんです。富岡幸一郎さんです。最後に土井義士さんです。

以上四名の方々に福田先生につきまして色々な角度から迫って戴きたいと思っております。先ず最初に各パネラーの方々に福田先生との関わり、或いは思いのある所を

簡単にお話戴ければと思いますので、井尻先生からよろしいでしょうか。

井尻　それじゃ最初にでどうやってすね、関わりと言っても私は、何か距離を置くと言いますか、好きな人間には近づきたくないという癖があります。しかしまぁ必要がある時は必ず会うときがあるであろうと、謂う様な気分でおりましたのですが、たまたま私、日本経済新聞文化部記者をやっておりましたので、インタビューをする機会が最初で御座いました。それから亡くなるまでにどうも五回ぐらいお目にかかっております。その内三回は雑誌を舞台にしたまぁインタビューまぁ対談という形で御座いますが、私が大磯の自宅にお伺いした時にこういう会話が有ったのですね。私はその時には福田恆存論を書きたいと、実は準備しておりましたのでこういう質問をしたんです。昭和二十九年外遊から帰って来てすぐ平和論に対する疑問を書き、いわば論客としての福田さんが爆発的に活動を始める、昭和三十年その頃ですね福田先生本当に孤軍奮闘されましたねと言ったら、さっとね、孤軍、孤軍では無いよと、こう言ったんですね。私ども外から見てますと当然、当時の進歩的文化人全員を敵に廻して一人で斬りまくっているというそういうイメージで私は孤軍と言ったんですが、福田先生はい

や、孤軍では無いんだと。どういう事ですかと、言ったら、いや、あの一人じゃない、詰まりですね、私が何かを書くと、例えば小林秀雄さんがお前の言っている事は正しい、と。

いつも励まして呉れたと言うんですね。要するにその言論の世界というのは数では無いんだよと、たった一人の信頼できる友人でも、お前が言っている事は正しいんだ、と、言われるとほとんど孤独を感じないと、孤立している感じは自分には無いんだ。

恐らくそう言っている福田さんにはですね小林秀雄というのはたまたま名前を挙げているのであって、そうでない読者、名も無き読者といっても良いかもしれませんが、そういう人間の声援を感じ取って自分は孤軍ではないんだ、と。言われました。これば、ややもすると、この言論の世界をですね、謂わば数の多数派少数派といいますかねそういう所で考えがちな人間に対する強烈な批判であると同時に励ましでもある、これは私へ大変な勇気を与えて下さった、と。思い出で御座います。

もう一回は私なりに福田恆存論を書き上げて一冊の本にしました。これを、お尋ねしてお渡ししたいという気持ちが嵩じまして、お電話をしてお邪魔したいんだと言いましたらすでにそれは亡くなる年で御座います、その連休明けぐらいだったで御座いましょ

うか、今病に臥しておるという事でしたが、私ちょっと我が儘を申し上げまして、お宅へ伺いました。それで私なりにこういう本を書いたんだと謂う事でお渡ししてその時は私自身はですね評論活動をするに当たって福田恆存論を書かないとどうしても前に進めないといいますかそんな気分が嵩じて、私なりの福田さんの仕事を復唱している様なものですけれど、その時はたまたま西部邁さんが一緒に連れて行ってくれと言うので私と西部さんと出版社日本教文社の編集白水さんと三人で伺った覚えがあります。

これでお目にかかるのは、そうそう、大変病が重かった訳ですが「君たちと会うのもこれが最後かな」と。でも死が近づいているといっても怖いという感じはしないんだ、非常に覚めた冷静な言葉を吐かれました。「この夏を超えられないかも知れない」そこまで自分の体力を推し量っている様な言葉を吐かれました。そういう言葉を聞いて、短時間ですがお暇いたしました。その様な事で私にとっての福田恆存先生というのは思えば二十代前半ぐらいから読み出して長い間、距離があるのは当然ですが、近づき難い存在でしたが幸いといいますか最晩年何回か謦咳に接する事が出来ました。私にとっての思い出の一端を述べるとそういう事になります。

金子　有り難う御座いました。坪内さんお願いします。

坪内　福田さんの最初愛読者だったのですけれど大学に入った年一九七八年に中公文庫で「人間・この劇的なるもの」それと「芸術はなにか」特に「人間・この劇的なるもの」に非常に感銘を受けて、丁度その年にサルトルの「嘔吐」を初めて読んで「人間・この劇的なるもの」はハムレット論としても読まれていますけれどサルトルの嘔吐論としても非常に優れた福田さんとサルトル、後にかなり思想的に違ったイメージがありますから、まぁ進歩派と保守派みたいに思われちゃいます。元々出発点みたいな所で似た部分があると思います。「人間・この劇的なるもの」「芸術とはなにか」を読んだんです。それを切っ掛けに次々、読んだんです。当時は福田さんの本ってなかなか新刊では手に入りにくくって、幸い僕は早稲田大学に通っているものですから早稲田の古本街で見つけて、少しずつ見つけて、こう、読んで行くと、非常に今思うと幸福だったと思うんです。逆に漫画的な全集だとかがあるとそこで全集を買っちゃってそして一度期にその人の書いた全作品というのをなんかこう手に入って読んだ気になって仕舞うあるいはすごくこう、早いスピードというか短期間でその人のを読んで仕舞

って、えー勿論そういう読み方も必要だと思いますけど、ある程度一人の思想家を時間をかけて読む必要が有ると思うんですけれど、そういう意味では非常にまぁ当時幸せだったんですけれど。

翌年の一九七九年に丁度今頃ですけれど十二月寒い頃ですけれど、週刊新潮に今でも告知版というかお尋ね欄みたいなのがあるのですけれど、そこで福田さんが秘書というか書生みたいなのを求むという告知がありました。そこで僕も好きな人にはなかなか会いに行けない方ですけれどその時は何だか大胆な行動に出て、会いに行った訳です。福田さんは当時、今は無くなっちったんですけれど銀座に昔明治時代は築地精養軒があった場所ですけれど銀座東急ホテルに仕事部屋を構えていらっしゃって、そこに会いに行ったんですけれど、その秘書というか書生の話というのはその年の暮れ、翌年の正月かな福田さんが風邪をこじらせて暫く静養されるという事なんです。それでその話は立ち消えになったんですけれど当時は僕は別にそんな演劇志望では全然無かったんですけれど寧ろその文学的というか思想的に福田さんに近づいて行ったんですけれど福田さんはなんかこう勘違いされて僕は演劇えー劇作家、演出家志望だと勘違いされて福田さんから連絡があるというのもあれな

んですけれど例えばこの芝居観に来なさいとか演出をするから例えばT.Sエリオットのカクテルパーティの演出を見に来ないか、それは、本当に猫に小判なんですけれど、その演出を隣で、何ですか今日その時の舞台カクテルパーティに出演なさっていた藤木さんだとか色々いらっしゃっていますけれど、当時あのカクテルパーティの稽古の時ある日福田さんの隣に変な若者が一人座っていた記憶がおありでしたら、それは僕です。（笑）そうこうする内に、その後色々あるんですけ、僕はまぁ学生時れど代が長くて、その後編集者になったんですけれども編集者になって、それで辞めて、辞めたのは一九九〇年なんですけれどその間も大磯の福田さんのお宅だとかに遊びに行ったりだとか色々何度かお目に掛かったんですけれど、福田さんが丁度こう亡くなられた頃、今年八周年ですけれど丁度この時期、寒い十一月の終わりに一九九四年の十一月二十日に亡くなられた訳ですけれどその頃僕は雑誌編集者を辞めてフリーの編集者で仕事していたんですけれどフリーの編集者の仕事をしながら、ちょこちょこと雑文というか短い文章を書いて、僕は元々編集者になりたいという気が強かったのですけれど物書きになりたいという気は全然無くて、フリーの編集者をやってちょこちょこ雑文を書

いていたら、それで生活出来たらそれ以上の幸福は無いという事で、満足していたんですけれどところがその、一九九四年の十一月に福田さんが亡くなられて、当時僕はよく文春の方と仕事していたんですけれど九四年十二月の暮れに、当時文学界の編集長だった寺田さんから電話が掛かって来て、福田さんの追悼を書かないかと。でー、何枚ぐらいですか、三十枚って言われて、ギョットしたんですけれど、その当時僕は十枚以上の文章というのは正確に言うと七枚以上の文章というのは書いていいか想像が付かなかったんです。

福田さんに関しては思い出とか色々自分の考え方の上で色々と影響を受けた訳です、そういうのを素直に書けば何とか書けるんじゃないかと、それで、「文学界」に三十枚程の福田さんについての追悼のエッセー「一九七九年の福田恆存」という文章ですけれどそれを書いたのです。

同じ頃、「諸君」の飯窪さんという人から電話が掛かって来て、「諸君」で福田恆存の追悼をやるんで、福田恆存と日本語について、三十枚ぐらい書いてくれないかと言われたんですけれど、僕はその時既に「文学界」で福田さん追悼を書く事になっていたんで、一本しか書くのは無理だと思って、それはお断りしたんですけれど、その時に飯窪さんと電話で話して、日本語の

問題だとかを話している内に、ちょうどその年の暮れ、暮れそうな秋に、大江健三郎がノーベル賞を取って、戦後民主主義って言葉が改めて話題になったんですけれど戦後民主主義って言葉の意味するものだとかそれぞれの人によって遣い方がかなりずれが有って、ずれが有る中でそれに対して肯定的に語ったり批判したりって、それはちょっと奇怪しいじゃないかむしろずれの部分も増して戦後民主主義の意味するものそれをこう誰かに書いて欲しい、と。これは編集者として飯窪さんに提案したんですけれどそしたら飯窪さんが、じゃ、坪内さん書いてみなよ、とした時に、まぁ無理だと僕はまぁ、さっきも言った様に三十枚一本でも無理ですから、でも、最終的に書く事になって「曖昧な日本の戦後民主主義」というのを「諸君」に書いたんです。今言った二本、両方「ストリートワイズ」という僕の最初の評論集に入ってます。今日、丁度販売してますんで興味ある人は是非買って下さい。その二つを書いた事が切っ掛けになって、論壇的な文章だとか、評論家的な文章を書く事になった訳です。ですから、福田さんがその時亡くならなければ、という訳じゃ無いんですけれど、福田さんにはもっともっと長生きして戴きたかったんですけれど、もし福田さんが九十歳の今日まで生きていたら、いわゆる評論

家にはなっていなかったかと思います。ですから、すごく、そういう意味で不思議な感じがします。

金子　有り難う御座いました。富岡さんお願い出来ますか。

富岡　私は残念ながら福田さんと直接お会いする機会が有りませんでした。最初に福田恆存に就いて書きましたのは一九八八年の「諸君」の一月号でありまして、丁度あのロビーに出ておりましたが福田さんの立派な文春の全集が多分完結した前後だったと思います。私もあれを読ませて戴きました。本屋であの本を見た時に、帯び文にとにかく感動しました。戦後の国語改革は人体実験をやる以上の暴挙であった、とかですね凄まじい帯び文でありまして。こういう私も若干福田さんの仕事は愛読してましたが、それを全集を通して読んだというのは大変大きな経験でありまして、その中で私は勿論「芸術とは何か」「人間この劇的なるもの」とか代表作がありますが、昭和三十二年頃に福田さんが書かれた一連の論文がありまして、「個人主義からの逃避」「西欧精神について」「絶対者の役割」こういう一連の論文がありました。私はその論文を拝見しまして非常に大事な日本の近代にあるいは戦後に於ける根本的な問題を福田恆存という

人が出しているなと思いました。その一つは「諸君」に書きました頃はいわゆるポストモダンと謂われている思想といいますかそれが日本でも流行して来た訳ですがその中でそのどうも私の感じでは当時のポストモダン現代思想というものは近代の問題から寧ろ逃げているというか、近代って問題を遣り過ごして仕舞っているんじゃないか、近代の超克というのが昔有りましたが、それと別な形で近代を遣り過ごす、同時にその頃は江戸学ブームというのでしょうか、レトロブームみたいなのが一方であると、そういう中で福田恆存の批評を読んだ時に、日本人にとって近代或いは近代化という問題の本質と言いますか、重要さが非常に強く書かれている所に一番印象深く思いました。そういう意味で、あの論文は近代の超克とポストモダンというタイトルで書いたと思いますが、その様な事があります。特に私がまぁその中で感じたのは「個人主義からの逃避」の中で言っているのですが、福田さんが、神の無い日本ですね、絶対神を必要としなかった日本人と、そういう主体の分析にまで迫らなければ、どうにもならない。

と、さらにそれを見事に分析し得た所でそれだけではどうと成るものでも無い、が、その自覚無しには近代文学がどうのとか近代精神がどうのと言っても徒に混乱を

巻き起こすだけだと、そういう文章がありました。当時、私は福田恆存と並んで自分のテーマとして読んでおりました日本の無協会キリスト教の内村鑑三を書いておりまして私はまぁ福田さんは無免許運転のカトリックなんて風にご自分で仰っておりましたけれども、ある意味非常に共通する日本の近代の問題に対するアプローチが有るなと、そういう意味で福田恆存の日本の近代に対する問題提起という事に非常に惹かれた訳です。前の年、八十七年ですね文春で福田さんが全集の刊行に因んで対談をされてをりましたけれど、その最後でこういう事を仰ったんですね。

絶対的な価値というのは只一つだと、それは後ろから照らしているので、背後ですね、後ろを向けないと、これは何らかの形で詳しく書きたいと思いますと言う事を文春の八十七年の三月号で語ってました。これは非常に興味深い言葉だなと思って、或る編集者の方から伺ったのですが、これは対談が終わった後に雑談に入った時に福田さんが喋ったと、それを編集者が起こしまして、対談の最後に付け加えたと伺いましたけれども非常に重大なテーマといいますか事を仰ったなと、私は全集のあとがきを読んでまして、あとがきの中にこの問題が書かれるであろうと期待し、また、そういうニュアンスで読みました。はっきり書

かれたか分かりませんが、全集のあとがきこそ福田さんが最後に残された大切なメッセージがあるなと今でも思っています。そういう意味で福田恆存の仕事っていうのは私にとっても非常に大きな意味を持った訳ですが又、今日、最初に司会の金子さんからも有りましたけれど今の日本の状況を見ていると此処までどうしょうも無くなって来ると本当に福田恆存に戻るしか無いでは無いかと、これはあらゆる問題でそういう所があるんじゃ無いか、それは後ほど話出るかと思いますが日本語の問題なんかもそうだと、日本語ブームと最近謂われていますが非常に表面的なものであって福田恆存が提示した日本語、詰まり言葉ってのが道具じゃ無くて文化的な主体なんだというそういう意味の日本語論というのと今の日本語ブームというのは似て非なるというか、感じがします。それから最近保守の論壇では親米と反米というまたぞろ、議論が繰り返されるという、いま関係者の皆様がいらっしゃるので言いにくいのですが、親米も反米もねぇんじゃ無いか、福田恆存の論文をもう一回読み返してみた方がいいんじゃないかという風に私なんかは思います。そういう意味でも改めて福田さんの仕事をですね見直す必要が有るかななんて勝手に思ってこういう風な会を持つ事が出来ました。実は

私の中ではドラマチストとしての福田恆存という観点が抜けていると思います、これはある方からも言われました。やっぱり福田恆存に於ける演劇といいますか、まさに三百人劇場という場所と福田さんのドラマチストとしての福田恆存という物を捉える必要がある、残念ながら私などは世代的に直接福田恆存の芝居をなかなか観る機会は有りませんでした。何年か前に回顧という事でここで、三本でしたかやった時に観ましたがなかなかそういう機会が有りません、是非福田さんの芝居が上演されたらいいんじゃないかなと思いますが、そういう意味で私にとって福田恆存は現在進行形のテーマだなと、思っております。

金子　有り難うございました。最後に土井さんお願いします。

土井　この度、事務方を仰せつかりました、土井です。有り難う御座いました。

私は、福田先生が京都産業大学で昭和四十四年から教えておられた際に授業を受けたり宿に行ってお話を伺ったりしました。その時、今の記憶で一番強く有りますのは三島由紀夫の話が出た時なのです。先生は非常に複雑な表情をされました、複雑であり、悲しそうな表情をされました。これは、差し障りがあるのかも知れませんが、福田先

生が疑問に思われたのは、三島君は何であんなにノーベル賞が欲しかったのだろうかと。大きな家に住んで、それが自分には解らないと、仰った。要するに賞を取るというのは、生活に困って賞を取りに行く事しか自分には解らない、と、そこの所がとにかく解らないと、仰ってました。

それと、先生の転機だと仰ってましたのは、チャタレー裁判で言葉が裁判所では通じないのだと、これまでの文芸評論であり、自分たちの遣っていた言葉は裁判所ではまるっきり通じなくて、どうすれば通じるのかと工夫してから、書くものが変わったと、いう風に仰ってました。それは生活人としての福田先生という面が有るのだと思うのです。それと演劇の事で言いますと、自分の中に有る近代的自我の問題を如何に解決するかと言う事に腐心されておられた方だと思います。

金子　有り難う御座いました。一通りお話して戴きましたけれど、短い時間で討議戴く事ですけれど、福田恆存が論じていないのは経済問題だけだと言われる事がありますが、非常に多岐に渡る仕事の中でその本質に短い時間で切り込むのは非常に難しい事かも知れませんが、ここは皆さんのご感心の有る事から掘り下げて戴いて単刀直入にその本質に迫って戴きたいと思います。ど

なたからでも結構ですので。お願い致します。井尻さんお願い致します。

井尻　限られた時間ですのでちょっとキツメの発言をさせて戴きます。私、この三百人劇場で今日、福田恆存先生を偲ぶという事で是非話してみたいなと、思いますのは、福田さんが小説という広い意味の文学の中で、小説と戯曲という形式で何を考えたか、確か小説で二編書いている筈ですね、一つはホレイショー日記という、ごく短いもの、もう一つは新聞に書いたエンターティメントです。通俗小説というか中間小説、私、タイトル忘れてしまいました。いずれにしても二編ぐらいしか書いて無い。このですね、精神が実は何処から来るのかと。福田さんが二十五歳の時に横光利一論を書いているんですね。これが最初の文芸評論なんです。これは横光の「家族会議」という小説をまぁ批判する訳ですが、つまり、心理小説ですね、横光利一の心理小説的な描写。いいですか。『私はこう言ったが内心ではそう思っていなかったとかね』つまり、小説という形式が持っている自由さ、小説の自由さというものがですね自己欺瞞や自己正当化に繋がって仕舞う、それを横光利一に感じて二十五歳の無名の福田さんが横光利一批判をする訳です。しかし、よく読んでみますとこれは、福田さん二十五歳で小説

にある意味では別れを告げているなと、実は私はそういう風に読んでいるんです。そこで自分が劇作家になる事は一言も書いて有りません。書いて無いが、結局、劇の面白さはひとたび科白としてこの舞台に言葉を発すると否応もなくそれが取り返しのつかない劇を孕んで来ると、その劇を孕んで来る、ある種の緊張感と倫理観、倫理学ですね、言語というものが否応も無く帯びて来る倫理学、つまり敵も出来れば身方も出来る、それはもう、修正が効かないのだと、しかし、どうも横光利一、始め小説家というものは、こうは言ったが内心はそうでは無かったとか、グヂャグチャ自己正当化しているんだと。この、ある種の気質ですね、気質が徹底的に二十五歳で出たなと。私はそう読んでいるんですね。それはまぁ、私の福田恆存論の最後の方に書いているんですが。えー。さて、もう一つ。チョット言わして戴きたいのは、今でこそですねこの、相対主義批判、というのは非常に活発になっております。特に西部邁なんかは相対主義批判で論客として出てくる形ですが、この相対主義批判というのものを、やはり戦後いち早くやったのが福田恆存であると。相対主義という無限の愚行を何時まで繰り返すのかと人間は必ず絶対が必要だと、絶対が無ければ生られない、そういう時が必ず来る、と。まぁ、一言で要約するとそう

いうフレーズになる訳ですね。その相対主義批判、絶対。と。それから昭和二十二年でしたか、「近代の宿命」というエッセイを書いておられるのですけれども、自由の問題と宿命の問題ですね、えー、この言ってみれば今、相対主義、或いは絶対糾問、宿命自由とそういう今日の日本人の謂わば精神の欠落している部分、いまだに欠落している部分を福田恆存はいち早く、だいたい、昭和二十二、三年ぐらいに、そういうキーワードをですね強烈に遣っていると。謂わば福田恆存さんの論客ぶりですね。その論客ぶりも問題も単に論争が好きだとか、そういう事じゃ無い、正に劇なんですね。私はその、二十五歳で福田さんが密かに、決意した事、これをこの三百人劇場というこの場所ですのでちょっと強調しておきたいなと思います。

金子　今、仰いました、価値相対主義への批判ですね。こう謂ったものはズーと福田さんの根底に流れていた御提言だったと思うのですけれど、先程一つ、富岡さんから近代の問題を取り上げられましたけれど、相対主義批判にしろ何にしろ、先ず、自我というものに対するぶつかり方の激しさ、深さ、これが結果として相対主義批判を生んだり、或いは防衛問題に対するそれを説く論者の人間として姿勢そのものに斬り込ん

で行くと謂うその深さ、鋭さ、そう言う所が自分とのぶつかりと言いますか、自我との、自分の自我とのぶつかりこう言ったものから最初、表現としての自由を読まれ始められたと謂う感じが私、しているんですけれども、まぁ、そういったもので皆さん方何かお考えを更に深めて戴けるお話が有れば、富岡さんどうぞ。

富岡　今、井尻さんが言われた、小説との決別というのですか、非常に、あぁそうかなと思いました。横光批判ですよね、これは結局、演劇精神ってものが近代って言いますか、十九世紀リアリズム小説の中で頽廃して行ったと、その中で自我意識というのですかね、私に拘る、そういうぐぢぐぢ拘るという自我意識のまぁ病気みたいなのが寧ろ小説のテーマになって仕舞ったと、それに対して福田恆存というのは演劇精神って言いますかギリシャ的な精神って言いますね。一方で面白いのはキリスト教的な絶対神っていうか、ある。一方でギリシャ的なそういう演劇精神って謂うのが有って、ニーチェの「悲劇の誕生」を福田さんどう読んだか記憶に無いのですが、ああいう何か近代の中に於いて近代を超えるそういう劇的精神って言いますか、そういうものの
まぁテーマが福田恆存の中に有ったんじゃないかと思うんですね。

そういう意味ではそういう問題を今日こらちにも投げかけているし、もう一つの今出た相対主義批判と謂うのは全くそうだと思いますね。ただ、三島由紀夫との違いって謂うのは、相対主義と絶対と謂うものとの関わりって言いますかね、あの、相対主義を単に批判して絶対に赴くと謂うのでは無くて、寧ろ絶対と謂う垂直の軸があるからこそ相対主義の力が発揮出来ると、これは福田さんの平和論なんかでもそうだと思うんですね。現地解決主義と言いますかそういう紛争に対する具体的な解決主義というのは決して相対主義では無くて、絶対平和って謂うものへの理念があるからこそ相対的な現地解決主義ってものが成立するんだって謂う、こういう思考は多分戦後の平和論の中でほとんど無かったんじゃなかったかと思うんですね。一人だけ保田與重郎が絶対平和論ってのを書いてますが、これはやっぱり近代を完全に否定するという形であって、チョット福田恆存とは違う平和論じゃないかなと謂う感じがしますけれど。その辺は、今のこういう新しい戦争って謂われているこの時代にですね。福田恆存の平和論って謂うのは何か戦後の憲法大事って謂う連中への批判だけじゃ無くて、非常に根本的な平和論って言いますか、として、今、読み直す事が出来るんじゃないかなと謂う風に私は、今、思っています。

金子　いま、絶対、相対と謂う話が出てまいりました。坪内さん、何かそれに就いて。

坪内　福田さんのですごく重要な本としてD.H.ロレンスの「アポカリプス論」の翻訳「現代人は愛しうるか」タイトルになっているんですけれど、これはすごく若き日の福田さんに物凄く必要な影響を与えたと思うんです。その中でD.H.ロレンスはキリスト教的な一神教的な神に対して異教徒的なアニミズム的なものを置く訳ですね。福田さんの場合でも、昭和の初めの時に横光利一だとか、自意識が文学的テーマだった時に、自意識まぁ、西欧の小説の中で発展として出て来る自意識というのは西欧モデルの場合は神の視線が有る訳ですね。神の視線に対抗するものとしての自我、自意識が有る訳ですけれど、その時、神というもの絶対的なものですけれど神というキリスト教的な唯一の神っていう風に置くかもっとアニミズム的な、まぁ八百万（やおよろず）っていう言い方がありますけれど多神教的な神とかによって絶対の意味が違って来ると思うんですよ。

ですから僕は、福田さんの相対主義批判っていうのがすごく優れていたと思うのは福田さんは相対主義を批判しているけれど、かといって、絶対的なものの教条主義的に

はならない。教条主義的なものに対しても一方では批判する訳です。ですからその時の福田さんの頭にある相対主義を批判する時の絶対的なもの、神とは、複数の神、だから、その多神教的な日本の八百万の神という言い方で戦争の時のネガティブなイメージが有る訳ですけれども、もう少しそこをネガティブなイメージとは別に元々の日本の神道的な多神教的なそういうものが福田さんの考え方にあったと思うんです。ですからそういう意味でゆくと今でもキリスト教とイスラムが対決といった場合でもキリスト教にしてもイスラムにしても唯一の神な訳ですよね。それに対して批判的な視点としての多神教的な神の視線という意味で福田さんの思想というのは今だに、かなり有効というか何時迄も現代的だと思うんです。

金子　昭和四十三年でしたか、三島さんと福田さんが対談された中で、三島さんが日本というものを絶対的に捉えられているとの考えに対して、非常に閉ざされたものだと謂う感じがすると、仰った事があるんですね。その辺が今坪内さんが仰ったロレンスで謂うとコスモスの世界に通通じる様な八百万の神々の「神ながらの道」に近い様な感覚でもって絶対をイメージされていたかと私自身もしていたんです。かつて竹内好

さんとの対談の中での、これは思考の段階では、ロジカルに考える段階でカトリック的な論理思考の必要性を逆に説かれていますのでこの辺をどちらにも偏せずにバランスをどう取るか、平衡感覚で、そんな所に福田さんの醍醐味が有る様な感じがしているんです。土井さんも何か福田さんの論をお書きですけれど絶対者に関した内容でも有ったと思うんですが何か今までの話を通しましてご意見が有れば。

土井　いや、何か用意して来た話と随分違うになって仕舞って。えー（絶対者に就いて）曖昧模糊としたものも有る訳でして、中間点が。絶対と相対という軸だけで無いものが多く有るのです。例えば芝居を書かれるという時に、例えば求心性と遠心性と謂う事を両方併せ持つ要素が有る訳で、絶対と相対という話になると興味が削がれるしまいますので、済みませんが。

金子　土井さんの論文の中でアポカリプス論に触れていらっしゃったのですが、確かに演劇を土井さんおやりなのでまぁ演劇の中にそう言ったものが思想として通うものがお感じになった部分が有るのかと思いまして。あのう、井尻先生のお書きになった本の中で、福田恆存を主人公にした戦後精神史をいづれ書いてみたいと、お書きになっ

ていたと思いますが、何かその辺は、書くとすれば骨子、骨格みたいなものだけでもお示し戴けないかと思いまして。

井尻　いや、私がその事をですね印したのは謂わば文体のドラマって謂う事を考えて、今も気になっている事ですが、つまり、小林秀雄と福田恆存の文章というのは、対照的だと思うのですね。整理して言ってしまえば非常に求心力というか或いは、何処かで歌い始める、歌って仕舞う小林秀雄、其れに対して福田恆存は歌うまいと、ほとんど頑なまでに決意している文章、小林秀雄が何処か詩に対応するフレーズを多用するのに対して福田恆存は徹底的に散文に徹すると、時にですます調まで遣ったりする訳ですけれども、この散文精神に徹しよう、或いは歌うまいと、決意したと、これは福田さんが若い時に小林秀雄に就いて二編か三編、有る訳ですけれども近づくまい、と謂うフレーズが繰り返されるのですね。自分は小林秀雄に近づかない、決意したと言っている。それと似てるんです。批評の文体という事から言いますとですね。

小林秀雄と福田恆存。或いは河上徹太郎と小林秀雄。或いは、グーと離れて石川淳が横目で何を見てたか、と。そういう事でですね近代批評とそれぞれが文体を工夫してその文体自体がドラマなのですね。あーも

う一人忘れていけないのが、中村光夫ですね。中村光夫がですます調とういう独特のものをどうして案出し固執しているかと、これ、それぞれ今挙げた様な文士達が表現者としてお互いに相手との距離感覚を作りながら評論活動をやったと、謂う事をどうやってドラマに出来るかと、謂うのが私のたまたま考えている事であります。

金子　思想のドラマみたいなものになって行く訳ですね。坪内さんも文章お書きになっていますけれど、福田恆存に於ける私小説と謂うものをどう捉えて行くかをテーマとしてお持ちの様だと思うのですが。

坪内　（笑って）テーマという程ではないですが、これは福田さんに限らず中村光夫にも共通しますけれども、一つの批評家としてのテーゼとして私（わたくし）小説を批判しているのだけれど、実際の作品としては私小説的なものが好きだという場合がありますね。それは福田さん嘉村磯多なんかを、高く評価していますけれどさっき言った意味で西欧の近代小説的なかたちの自我と神の目線のぶつかり合いみたいなのが無い訳だから、そうした時に西欧モデルの小説を書いたら、それはインチキになってしまう訳です。そうだったら、日本の私、私って謂うのは有るが儘に、そこの所で、有

るが儘のふりをしながらどこかで自分を甘えさせる嘘。嘘が混じるのに対しては非常に厳しい目で見る訳ですけれども、ギリギリまでの自分を書いて行くという形の私小説というのは福田さんは評価したのではないですか。あと、もう一つは、一種の職人性ですよね。福田さんって、やっぱり神田の生まれという事もあります。職人的なものがね。晩年でも、福田さん最後に永井龍男論を書きたいと仰ってたんです。永井龍男と福田さんっていうのが以外と謂えば以外だけど生まれ育ちが似てたりとか、或いは福田さんが千九百七十九年か八十年ぐらいに雑誌「昴」で「私の一編」って謂うエッセイを書いて、その時に上司小剣の「ごりがん」というこれは大阪の話だけれど、日本の古めかしい職人性を持った小説が好きだった、それは思想の部分とは別に、感受性の部分で好きだったんじゃないですか。

金子　色々話が飛んでいますけれど、富岡さんの話に戻りますけれど福田さんから晩年に葉書と言いますか手紙を貰われたとう事で、これは公にされている文章にお書きになったんで、触れてもいいのかと思うのですが。絶対者、先程、後ろから照らしている者にまともに見つめられないと謂う所ですね。あれに対して福田さんからお言葉が来たと謂う事をお聞きしたのですが。

富岡　ちょっと言おうとしたんですが、あの文にそれ書いて、その後ろから照らしてんの、振り向いてちゃ駄目だと、振り向くと、振り向いて書くと、トマスアキナスの神学大全に成る訳です。だから光を受けて書くと発言していたので、これは是非、見たいという事を私は書いたら、福田さんが脳梗塞ですかご病気になって、それは主体の分析にしたいけれどどうしょうもない、と。で、この病もどうしょうもないものだと。ちょっと最後、或る少しユーモアというか、こちらの、さっき土井さんから出た絶対か相対かというどっちだという論文、まぁ私のエッセイに対して、ちょっとそれとは違ったニュアンスの短い葉書でしたが、受け取りました。そういう所に福田さんの、先程、逸さんが仰っていた様な遊びごころというかユーモアというか、演劇精神っていうか、謂うものがあるのかなと、思うんですね。それは、さっき井尻さんが仰ってた福田恆存の散文精神っていうのか、散文に対する一種の健康さというものがあると思うのです。今日は初めてビデオを見て、中村光夫が出てビックリしたんです。出てきたかと思って、中村光夫と福田恆存とは隣に居るだけで随分違うなって謂うね。あの、違いは一体何だろうかと謂うのを。僕は中村光夫って或る意味、小林秀雄に対し

て、やっぱり歌うまい、と。
ある種の散文精神をですます調で遣り抜こうとした人ですね。芝居も書いたし、晩年は小説も物したと、しかし、中村光夫さんの雰囲気と福田恆存の散文精神は上手く言えないのですが、対照的な所もあるなと謂う風な思いをしました。そういう意味では小林秀雄って謂うひとつの先達というか文芸批評の先達に対して、あの二人がそれぞれの散文ってものを時代の中で作作ろうとしたと謂うのは改めて面白いという感じがするのですね。中村さんをそれ程読んでいないんですが、妙に気になる人ですね。あの顔付きとか話っぷりはそんな感じがしました。

金子　色々、話し出したらきりが無いのですが、先程、福田逸さんから今年ですかね、日本語ブームと謂う事が出ましたが、福田さん自身が、私の書いた物は他の物は読まなくてもいいけれども、「私の国語教室」は是非読んでくれ、とお書きになったと思いますし、その本が今年は文庫本としてこの日本語ブームの中で出たと画期的な事だと見ているんですけれど、丁度今年は福田先生の生誕九十年でもありますけれどいわゆる国語問題がスタートしてから百年と謂う事で、国語百年でもあると謂う捉え方をしているのですが丁度明治三十五年に国語調

査委員会というのが官製の組織として始まって、ここから正かな正漢字をなし崩しにして行く動きが始まっていると。特に戦後のGHQの干渉もあってローマ字化も含めて色々な国語改革に向かって行って現在に至っているのですけれど、昨今の齋藤孝を始めとする日本語ブームですね。こんな中で福田さんの説かれて来た国語というテーマ、これをどういう風に位置付けて考えて行くべきか。是に就いて触れて戴ければと思います。

富岡　私は福田さんの国語教室の中で、言葉が道具では無いという事ですよね。正に文化そのものなんだって謂うその根本的な捉え方が非常に重要じゃ無いかなと思います。私はほとんど遣わないのですが、パソコンとかワードプロセッサーで所謂正字とか旧かな遣い、正かなと謂うのですか、変換可能になって来ますけれど、恐らくそういう所での技術的な仕様の問題というのが言葉は一種の道具としての国語の復権だと、しかし、福田恆存が言っている事は主体としての正に日本人というものに関わるそういう意味での日本語って事じゃないかと思うんですね、だからその辺の事をはっきり踏まえて今の日本語問題ってのを論じないと混乱が起きるのかなと謂うのが私の印象ですけれども。

金子　他の方、何か御座いましたら。

井尻　言葉と同時に福田さんは町名変更といいますか、地名変更にも大変最後に批判的で、そんな話をちょっと私、会話でした事が有ります。結局ですね、地名の問題に今限定して言うと、歴史から離脱するといいますか或いは歴史を水増しして希釈して仕舞うと言いますか、そういう事が地名変更の流れを作っているんだと例えば埼玉を平仮名にしてさいたま市だと、これから町村合併をやるとほとんど平仮名の地名が私は出ると直感している訳ですが、或いは、みずほ銀行、その他さくら銀行とかとまと銀行とか、要するに日本の漢字の意味と出来るだけ離脱する、降りて仕舞う、或いは、地名に於いて歴史を体現している漢字を遣わないで平仮名に行って仕舞う。これは歴史からの大逃亡時代でこれは恐るべき空虚な所に突入して行くと、ですから言葉と同時に地名の問題も併せて福田さんは最後に仰っておったと。そんな風に思いますね。

金子　あのー、絶対、相対とさっきの話も同じ様な所にも行って仕舞うのだと思いますけれど、言葉とは自分で作ったものでは有りませんから自分の歴史性のある中で自分が言葉を自ずと学んでいる。その意味で先

程、絶対だとか全体だとか福田さん仰いますがそういったものを一番身近に抽象的に意識しないでも自然と自分の呼吸の様に遣っているものが唯一言葉というものにもしかすると位置づけられるかなと、そういう意味で自分と全体、自分を超えたものというものを生活感覚の中で自然と身につけて行くその中で歴史的な連続性が失われる事に対する相当な憤りが当然お有りになったと思いますし、そこがやっぱり真芯（ましん）を捉えた日本語論でないとなかなか本質をついた風にならないとそんな所に行き着くのかなという感じがしますけれど。坪内さんどうぞ。

坪内　僕は福田さんの本は重要な本だと思うんですけれども、僕は昔、その大学の修士論文とかは正かなで書いたのですけれど、新仮名に戻して、それは当時福田さんのは福田さんキチンとした伝統の中で正字正仮名は素晴らしいのだけれど、その真似をしただけの人がいて、その真似をしただけの人が正字正仮名であるだけで自分は優れているという風に、そういう人が何人も居たんです。それを見て僕は非常に反発を感じて、と、僕はだからあの本は素晴らしいし、あれだけれども、あれを例えば、若い人キチットとその文脈の中でちゃんと理解してだったらあれだけれど、単に形だけで一種

のコスプレの様にして正字正仮名書いて、そして、新字新仮名の人たちに対して、自分を高みにみせる為にそれをひとつの意匠として遣うような事があるんだったら僕は其れに対しては、あのー福田さんが好きだからこそ、そういうのに対しては何時か批判を書きたいですね。

富岡　私もそれは同感です。まぁ坪内さんとだいたい同世代でしてそういう事があるんですね。だからさっきから言った主体と謂うのは全くそうですね。去年、一昨年でしたか、台湾に行きまして、作家の小川国夫さんと行ったんですけれど台湾は漢字を遣って、まぁ中国も漢体字というか略字遣ってますんで漢字があった様です。小川国夫さんと歩いていたら、突然小川さんが、「やぁ、富岡さん、福田恆存が言っていた事はやっぱり正しいですね」と仰って、ああそうなのかなと。作家は、非常に言葉に対して、勿論、小川さんなんか今もあれ遣っていると思うんです。言葉に対して鋭敏な存在、文学者っていうのは福田恆存の問題って謂うのを何処かで意識されているんだなあって事を向こうへ行った時に改めて感じた事がありました。

金子　先程、坪内さんのコスプレ日本語論、今の現代でも逆の立場で正字正仮名をそう

いう風に位置づけてる人もいますかも、以前は国語改革に取り組んだ方々も例えば柴田武さんですか以前東大で言語学者でバリバリだった方だったですけれど、日本語はやがてローマ字化して行くべきだと謂う筋で展開されましたけれど、今、現在は日本語ブームに乗られまして、漢字は如何に面白いかと、そういう漢字の面白さ、そういう立場で今、全く百八十度違う事をお書きですね、あの改革は一体なんだっんだと。只かたちとしての現代仮名遣いと漢字をかなり略化した結末だけが残って、其れを私達はどう受け止めて行くべきかが私達の課題になると思うのです。

坪内　百年前、明治三十五年ぐらいにある種の言文一致とは、小説だと明治二十年ぐらいですけれど、論説の上での新聞言葉だとかの言文一致ってのは明治の後半に出てくる訳ですね。書き言葉と話し言葉のずれってのをどうやって一致させようかという事でそういう新しい表記みたいなのが出てくる訳です。今だから日本語ブームだからとかねそういう話をしていても話し言葉と書き言葉ってのが今また「ずれ」がある、特に文章を皆んな書かなくなったと言うけれども一方でインターネットだとかで却って以前よりもそういう形で書き言葉に接する機会が増えた訳ですね。そうした時のイン

ターネットの書き言葉には独特の世界があるでしょう、それが正しい書き言葉と話し言葉とのその中でこう書き言葉の基本というのが今、新しく模索されている感じだね。その中での日本語ブームがねそういう意味で、福田さんの日本語論が非常に今でも問題提起として重要な本だと思います。

金子　時間も過ぎておりましてなかなかこう謂ったシンポジウム、結論も出ませんし、論じ尽くせ無いもので結果に終わって仕舞うのですが、最後に何か、一言有りましたらお願いしますし、無ければ一応是で閉めたいと思います。宜しいでしょうか。また、先生方もですね色んな立場で。

坪内　リクエストが有るのですが、福田さんの戯曲で「最後の切り札」ってね、戦後直ぐに出た、これは凄い、素晴らしい作品なのですけれど、メタ・シアターと謂うか、だけどこれは、一度も上演された事が無いと謂う、非常に是は上演が不可能なのかじゃないかと謂うぐらいかなり、不思議な構造、構成を持った芝居ですが、それを是非この舞台で観たいですから、宜しくお願いします。

金子　本当は質疑応答の時間を持ちたかったのですが、時間が押しておりまして、時間

を持てない事をお許し戴きたいと思います。以上をもちまして、第三部シンポジウム終了させて戴きます。どうも有り難う御座いました。